

## 「私の挑戦〜ロボットと故郷〜」

新潟県長岡市立南中学校

三年 下 川 祥 汰

二〇一一年三月一日。当時、私は福島県郡山市に住んでいた。私はまだ幼稚園。私の運命を変える出来事がある日、起こった。幼稚園から帰った直後のことだった。突然、家が揺れ始めた。東日本大震災である。大きな揺れは大地を揺るがし、行方不明者も含め約二十万人もの人々の尊い命が失われた。翌日、海沿いの原子力発電所で事故が起き、放射性物質が漏れ出し、広範囲に広がっていった。それにより、県外への避難を余儀なくされた人々も多くいる。私も、そのうちの一人である。

あの悪夢の震災から一年後、私は新潟県長岡市に引っ越した。故郷を復興させるため、少しでも自分ができることをしたかった。郡山の友達とも離れてしまい、私は心がむなしくなった。震災の傷跡は消えることはない。震災から八年の月日が流れたが、今でも故郷に帰れぬままの人が大勢いる。私はそんな人たちのことを思うと、決してひとごとのようにとは思えない。そんな、中学二年生の時のこと。新聞を読んでいた私は、気づいたらある記事を夢中で読んでいた。その記事とは、福島県で行われた「廃炉創造ロボコン」大会に長岡工業高等専門学校が出場し、見事最優秀賞に輝いたというものだった。それ

は、原発を想定した施設内で自分たちで作ったロボットを使い、放射性物質に似せたボールなどを回収する、いわば放射性物質を除去するロボットを競う大会だった。その瞬間、私は「これだ!」と心に思った。その日から私は将来、技術者になって廃炉ロボットを作り、故郷を除去して震災からの復興に貢献するという夢を持つようになった。その夢を叶えるため、私は中学を卒業したら、長岡高専を受験する決心をした。廃炉ロボットで優勝した長岡高専の先輩方の後を追うこと。それが、今の私の達成すべき目標である。

自分の目標を達成するためには、まずはしっかりと勉強しなくてはならない。そのために私は、日々、がむしゃらになって勉強している。国語、社会はもちろん、工業やロボット工学には必要不可欠な数学、理科、英語を必死でがんばっている。その結果、少しずつではあるが、成績も上がってきている。だが、だからといって油断は禁物である。普段から私は心にそう言い聞かせている。私が目指すは故郷東北の人々の期待の星。私は必ずや、東北を復興させてみせる。私は、心にそう誓った。

中学三年になってからも、私は自分の夢へ続く道を止まらず進み続けている。私は夏休みのオープンスクールで長岡高専へ行った。実際に行ってみると長岡高専は、まさに自分の夢を叶えるのにぴったりの場所だった。体験学習で実際に動かしたロボットはおもしろかったし、何よりそのロボットの仕組みに驚いた。このようなロボットが将来、故郷の復興に役立っているところを想像すると、今から楽しみになってきた。

その後は、ロボット関係の行事や大会にも積極的に参加するようになった。夏休み中に全国のチームが集まってロボットの性能を競い合う、「ロボコン

ジャパンカップ」を見に行った。そこにはたくさんロボットが展示されていた。例えば、しゃべるロボット、歩くロボット、そして、人による操作なしで勝手に動くロボットまであった。これらのロボットを見た私は、とても感動した。まさに、今の現代社会に普及しつつあるAI。このAI、いわゆる人工知能を廃炉ロボットに役立てていくことは大変難しいことではあるが、そうすることで東北の復興が叶うのなら、ぜひやりたい。そう、私を震災の失意から立ち直らせてくれたのは「ロボット」の存在や、多くの人からの心の支えであった。それらがあつたから、私はここまで成長することができた。

私が夢見る、ロボットによる放射線物質の除去や故郷の復興。今、私はそれらを実現するために戦い続けている。そして、中学三年である今、長岡高専の合格を勝ち取るため、受験勉強で大忙しである。私は、震災にもめげず、ここまで成長してきた。それも、「ロボット」の存在や、「支え」、そして「思いやり」という素晴らしい宝物があつたからこそ。

私は、必ず自分の夢を実現させるため、長い旅に出ている。その旅は当分終わらないが、いつまでも故郷やそこにいる人々を思いやる気持ちは変わらない。私は、さらに自分を成長させ、故郷の復興という夢を叶えるため、これからもがんばっていきたい。故郷の人々の「期待の星」という目標を目指して。